

山の麓にある、 縁生の家 (前編)



あまんの ダイアログ 10

おとしの冬「入所者のターミナルケアの振り返りとメモリアルカンファレンス」の講師に招かれ始めてその施設へ足を運んだ。施設の名は『穂高悠生寮』。そこで生活する人々は、寮の名前の通り、安曇野穂高の大自然の中で悠々と生きておられた。しかし隣接する自治体の施設だというのに、私の近所でもその施設の存在を知らない人は多い。「バリアフリー」を提唱する社会の嘘を垣間見た思いがした。

「二十億光年の孤独」という谷川俊太郎氏の詩をご存知だろう

か？詩の中の「万有重力とは引き合う孤独の力である 宇宙はひびくんでいる それ故みんなは求め合う」この一節が、入所者の方々の生活・関係のあり方をずばりと言っているように思う。現代は「無縁社会」と言われ「孤独死」が増加している。しかし「引き合う孤独の力」があり、そこに縁が生まれている場所がある。インタビューを通してそれを読み解いていただけたら幸甚に思う。

あまん 恵道



きたざわ かつみ
北澤克巳

60歳。インタビュー当時(2010年2月)は『穂高悠生寮』施設長。障がい者のみなさんとの関わりをライフワークにしたいため、定年後は施設からより地域に近い場所で、関わりを持ち始めました。若いみなさんと汗と感謝の日々です。



いじま けい どう
飯島恵道

長野県松本生まれ。尼寺育ち。看護師としての経験を生かし、医療と宗教の領域を横断する「あまんず(amans=ama(尼)+ns(ナース、看護師))」として活動中。

「お母ちゃん、お父ちゃんがいないから何もしないじゃないか」って言い出しました。子どもに暴力的なことを言われて傷ついたAさんは親子分離が図られたんです。当時Aさんは75歳を過ぎてましたから、近くの高齢者の施設に入所しました。そうしたら4日もしな

良い話があるんです。ある利用者のAさんは、現在78歳。3年前までは一家を成していた奥さんで、お子さんが二人いらつしやいます。ある時、旦那さんが急死されたのですが、実は家事や子育ては旦那さんがしていて、Aさんは「お母ちゃん」という存在だけであつて、お母ちゃんとしての役割は全部旦那さんがやっていたんです。旦那さんが亡くなると子どもたちは

互いの居場所を互いに作る

「お母ちゃん、お父ちゃんがいないから何もしないじゃないか」って言い出しました。子どもに暴力的なことを言われて傷ついたAさんは親子分離が図られたんです。当時Aさんは75歳を過ぎてましたから、近くの高齢者の施設に入所しました。そうしたら4日もしな

うちに、他の利用者さんが「障がい者である」この人とは一緒に暮らせないといい出して、早々に退所させられてしまいました。それでここに入所されたんです。そうしたら、ここではAさんの一方的なお喋りにも、他の利用者さんは嫌な顔をせず「うんうん」って聞いてくれた。つまりAさんは、ここでは全然困った人でも特異な人でも、ましてや問題になる人でもなかったんです。居場所が出来たんですね。